

令和7年度第1回
松戸市総合教育会議会議録

令和7年8月6日

松戸市総合政策部政策推進課

令和7年度第1回松戸市総合教育会議
次第

日時：令和7年8月6日（水）
午後1時00分から
場所：教育委員会5階会議室

1 開会

2 議事

議題1 松戸市教育大綱の見直しについて

3 その他

4 閉会

◎開会

○渡邊政策推進課長

それでは、定刻となりましたので、会議を始めさせていただきます。

本日はご多忙の中、令和7年度第1回松戸市総合教育会議にご参集いただきましてありがとうございます。

本日司会を務めさせていただきます、総合政策部政策推進課の渡邊でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは皆様机の上に用意していただいておりますが、資料を確認させていただきたいと存じます。まずはじめに本日の次第、A4縦のものでございます。

それから席次、出席者一覧、これもA4縦のものでございます。

それから、A3で、右上に資料1と書いてございます「現・松戸市教育大綱と見直しの視点について」といったもの。

それから参考資料といたしまして「松戸市教育大綱」、これがA4カラーの3枚ものでございます。以上となります。

不足されている方いらっしゃいますでしょうか。

よろしいでしょうか。ありがとうございます。

松戸市長が総合教育会議に出席するのは、本日が初めてでございますので、一言ごあいさつをいただきたいと存じます。

お願いいたします。

○松戸市長

改めまして、皆さんこんにちは。

市長の松戸隆政でございます。

本日はお暑い中、またお忙しい中、松戸市総合教育会議にお集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。

日頃より、教育行政にご尽力をいただき、誠にありがとうございます。

松戸市に限らず、やはり今全国的にも、教育環境というのは激変をしております。

親御さんの経済格差が、教育、様々な体験格差にも繋がり、また学校現場では、デジタル化の推進など、様々な教育現場の変化というのが起こっている中で、やはり松戸市のこどもさんたちが、誰1人取り残されず、みんなが夢を持って進めるような、成長できるような、そういった教育環境を整備することは、私たち、この教育行政の関わる人間の大きな役割だと思っております。

そしてそのためには、やはり教育だけではなく、福祉部門であるとか、文化スポーツ部門など、様々な部門がオール松戸で取り組んでいく必要があらうと思っております。

本日、今回の会議では、この松戸市の教育大綱の改定に係る会議となっております。

ぜひ皆様方から、様々なご意見をいただければと思っておりますので、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○渡邊政策推進課長

ありがとうございました。

これより、松戸市長に議事の進行をお願いいたします。

松戸市長よろしく願いいたします。

○松戸市長

ここからは着座で進めさせていただきたいと思います。

よろしく願いいたします。

まず、傍聴についてご報告をいたします。

本日の会議では1名の方から傍聴したい旨の申し出がございます。

本会議につきましては、本日、非公開にすべき事項がないことが見込まれるため、松戸市総合教育会議規程第7条に基づき、公開とし、松戸市総合教育会議傍聴要領に基づき、傍聴人の受け入れについて許可をいたします。

また、会議開会以降、傍聴希望者があれば随時入室を許可いたします。

では傍聴人を入場させてください。

次に本会議では議事録を公開したいと考えております。

また、正確を期すため、録音につきましても、ご了承願います。

今回の会議の議事、議事録署名人については、武田委員、山形委員の2名をお願いをいたします。

それではこれより、令和7年度第1回松戸市総合教育会議を開会いたします。

それでは、お手元にお配りしております次第に沿って議事を進めます。

本日の議題は、松戸市教育大綱の見直しについて、であります。

進め方といたしましては、資料について、担当部署から説明をした後に意見交換を行います。

まずは事務局の説明をお願いいたします。

◎松戸市教育大綱の見直しについて

○渡邊政策推進課長

それでは資料1について議題の付議部署である総合政策部伊東部長からご説明をいたします。よろしく願いいたします。

○伊東総合政策部長

総合政策部長の伊東でございます。

日頃は松戸市政にご協力を賜り、誠にありがとうございます。

それでは、資料の1、「現・松戸市教育大綱と見直しの視点について」ご説明させていただきます。

こちらの資料では、上段に松戸市教育大綱について、中段に現教育大綱の構成、下段に見直しの主な視点について記載をしております。

まず、松戸市教育大綱についてご説明いたします。

1、趣旨といたしまして、平成26年6月の法改正により、新たな教育委員会制度として、市長は、教育行政に関する教育大綱を策定すること、総合教育会議を設置することが定められました。

教育大綱は、総合教育会議におきまして、市長と教育委員会が協議、調整して策定する、本市の教育、学術及び文化の振興に関する施策の根本的な方針を定めるものとなっております。

2、策定及び改定概要でございますが、平成28年1月に、教育大綱を初めて策定し、その後、令和3年4月からスタートしている。現在の教育大綱に改定を行っております。

現教育大綱が今年度で終了することから、今年度中に、再び改定を行いたいと考えております。

3、大綱の位置付けといたしまして、松戸市総合計画を上位計画として、その下に、松戸市教育大綱は位置付けられております。

次に、現松戸市教育大綱についてですが、みんなで育てる、みんなが育つ松戸の未来という基本理念を4つの柱で支えるという構成になっております。

今回の教育大綱の見直しに当たりましては、現在の、社会の変化に即して、スピード感を持って進化をしていけるように、新たに3つの視点を加えることが必要ではないかと考え提案するものでございます。

1つ目は、福祉の視点です。

令和5年度に国では、こどもに関する政策を総合的に推進するため、こども家庭庁が設置されました。こども政策に関する新たな方針が定められ、こどもの未来を応援する「こどもまんなか社会」の実現を目指して、置かれている環境等にかかわらず、すべてのこどもたちが能力や個性を伸ばせる環境を整えることが重要だととらえております。

2つ目は、教育環境の視点です。

小中学校の施設の老朽化が進む中、こどもたちが快適な学習環境で教育を受けられる環境を整えることが重要ととらえております。

また、すべてのこどもがデジタル社会に対応できる能力を身につけられるよう、環境を整えることも大切ととらえております。

3つ目は、新しい文化スポーツの視点でございます。

2021年、令和3年には、東京で2度目のオリンピックパラリンピックが開催され、アーバンスポーツなど、例えばスケートボードやブレイキン、BMXなど、音楽やファッションと融合した若者文化と発展してきたスポーツでございますが、そういったものが広く世間に知れ渡ることとなりました。

松戸市でも、ホストタウンとして、オリンピックパラリンピックに取り組んできた経過もありますが、そこからさらに発展して、単に文化スポーツの振興にとどまらず、文化芸術やスポーツの多様な価値を生かし、社会全体を豊かにするという方向性で見直しをする必要があると考えております。

なお、本日の意見交換を踏まえまして、次回の会議に向けて、大綱の改定案を、調整して参りたいと存じます。

どうぞよろしくお願いいたします。

総合政策部からは以上でございます。

○渡邊政策推進課長

ありがとうございました。

ここからの意見交換等に先立ちまして事務局からお願いが2点ほどございます。

1点目は、議事録作成の関係から、ご発言の際には、お名前をおっしゃってからご発言いただけると助かります。

2点目は、ご発言の際はできるだけマイクに近づきまして、ご発言いただきますよう、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

それでは市長、進行をよろしくお願いいたします。

○松戸市長

まずですね、資料の説明が以上の通りでございますので、この説明についての質問等がまずありましたらいただければと思っております。

（波田教育長）

教育長の波田でございます。

ご説明ありがとうございました。確認ですけれども、新たに加える3つの視点というのが示されましたが、これは既存の基本理念を支える4つの柱にプラス3つっていうようなイメージなのか、柱と視点というような文言の違いがありますから、こういう考え方を、これから実際に話をしていくときに、柱を4つにするのか、幾つにするのかってのはわかりませんけれども、その柱の中に組み込んでいくというようなイメージなのか、そこだけ確認をしたいと思います。

○伊東総合政策部長

ご質問ありがとうございます。

総合政策部の検討の中では、柱の中に、この視点を組み入れていくと考えております。

ただし、皆様のご意見も踏まえまして、そこは柔軟に対応して参りたいと考えております。

以上です。

○松戸市長

ありがとうございました。

他に何か質問がありましたらお願いいたします。

それでは質問はないようでございますので、資料説明の内容を踏まえて、意見交換に移らせていただきます。

これまでの意見交換の内容も踏まえご意見等がありましたら、どうぞよろしくお願いいたします。

（武田委員）

最初に、市長がこれに関わって始めてになるので、この大綱をご覧になって、中身等の感想というか、ご自身の思いとか、どういうふうなお考えをお持ちになるかをまずお伺いしたいと思います。

○松戸市長

ありがとうございます。

今現大綱について、4つの柱があるということで、まさにこれはですね、教育において基本というか、大事な4つの視点だと思っております。

グローバル社会の中で活躍できる人材を育成するとか、特色ある学校づくり、地域で活躍する人材育成、松戸の地元愛の醸成、ということで、これがベースにあらうかと思っております。

それに対してですね、新たに加える3つの視点というのは、私自身、教育に関する思いというか、公約等でも掲げさせていただいた思いというのを、こちらの3つの中にもある程度反映させていただいた部分があります。

例えば、先ほどお話をさせていただきましたが、今親御さんの経済格差なんかもありまして、こどもさんたちが機会の格差というかですね、体験格差なんていることが言われる中で、やはりそういった体験格差をできる限り縮めていって、すべてのこどもさんたちにチャンスをと、という思いを持って、

この福祉部門と福祉の視点を入れていかなければいけない、というような公約を掲げさせていただいたりですね。また教育環境の視点で言えば、今学校も体育館も含めて老朽化も進んでいたり、今体育館に関しては冷房を今年入れさせていただくんですけれども、そういった教育環境を快適に学べる環境、あとデジタル化の話もそうなんですけども、そういうのも整えていかなければいけないよねという話をさせていただきまして、そういった快適な学習環境で教育を受けられる環境を整えようということも公約で挙げさせていただきました。

またやはり今、スポーツなんかを見てるとですね、多様なスポーツが生まれる中で、文化も、ダンスであるとかまた、V t u b e rとかですねいろんな新しい価値観というのが、若者の中で出てきているというのを、いかに、そういった個性というかですね、思いというのを、教育の中でも拾い上げていけるかというのも大事な視点だということで、こちらを書かせていただきました。

そういった観点をある程度反映をさせていただきたいなということで、今回この3つの視点も加えさせていただいたところでありますので、私としてはこれまでのベースとなる柱に、新たな視点を加えるということで、私は、こういった形がいいなという思いを持っているところであります。

（武田委員）

この3つの視点というのは市長の思いからということですか。

○松戸市長

私の思いもありってということですね。思いプラスこどもまんなか社会の実現とか、国の環境なんかも踏まえながら、入れさせていただいたというところです。

（伊藤委員）

伊藤でございます。

そういう市長の思いがこの視点の中に入っているということを教えていただいてありがとうございます。基本的には現在の教育大綱をベースにして、新しい視点を加えるというような考え方で議論をしていいのかなというふうに思います。

それでそういう観点からとりあえずの意見ですが、1の福祉の視点という言葉自体が、ちょっとあんまりぴんとこないんですけれども、こどもをもっと重点的に、こどもまんなか社会っていうんですか、そういう新しいフレーズを取り入れて、もっと重点的にこどものことを考えていくというそういう観点から、いろんな政策を打ち出していくというのは私も大賛成ですので、これはいろんな形で記述として加えていいんじゃないかなというふうに思います。

それから老朽化した施設の改修とかそういうのはもうこれは言ってみれば当然のことで、言わずもがなだと思っています。だから言わなくても当然、今も現にやってるんですが、ただこれを市民向けにこういうことをさらに力を入れてやりますよということであれば、さりげなく1つの文章として入れるということは問題ないのかなというふうに思っております。

それから3番目の文化スポーツの視点なんですけど、新しい文化スポーツというのが、市民の大半の人にとっては果たしてどれほど、受け入れられるのかっていうのを私も含めて、ちょっとこの疑問を持っています。

特に、ここには出てませんが例えばeスポーツとかいうのも一時流行って、松戸駅にも何かそういう施設ができて今どうなっているのか知らないですけども。ああいうeスポーツみたいなものは個人

的にはスポーツじゃないと思ってるんですけども、市民の皆さんが、全体的に、いやこれもスポーツだというふうに言われるのであれば、例えばそういったものに松戸が新たに取り組むことにあえて反対するわけではないのですが。

ただ松戸の文化スポーツが、現在のままで例えばスポーツについて言えば、公認されるような野球場とかいろんなものもない状況のもとで、果たして松戸の1つの方針として、もう既存のスポーツよりもむしろその新しいスポーツに力を入れて方向転換していくんだとか、それだけの意欲があるのであれば、ひとつの政策判断として大きな柱の中に入れ込んで差し支えないと思いますが、まだそこまでの判断がないのであれば、新たなスポーツというものを、やるほどのことはまだないのかなと思っていますので、この点については、私自身は少しネガティブな感じを持っています。

とりあえず以上でございます。

○松戸市長

まず教育環境なんですけど、おっしゃる通り老朽化であるとかに関しては、その通り、当たり前のことなんで、そこまでいうことはないのかなあというのはおっしゃる通りだと思います。

ただ、今、少子化が進む中で、学校の再編も含めてですね、そして新たな国からも示されてるような教育の形という中で、これまでの学校の施設も、少しずつ変えていかなきゃいけないとかですね、そういったところを踏まえて、デジタル化もありますんで、必ずしもデジタルの教育だけがいいわけではなくてですね、もちろん紙の教育というか、これまでの従来のものを否定するわけではないんですけども、そういった新しいデジタルも含めた教育環境の整備というのが、これから必要になるのかなということで、こちらを書かせていただいたと。

あと、新しい文化スポーツなんですけども、やはり決してですね、野球とかサッカーとか、既存のスポーツとかですね、旧来からある文化というのを否定するわけではなくて、ここに書いてある通り、もともとの柱っていうのが、地元愛の醸成とかで書いてある通り、ベースとなる文化スポーツを支援しつつ、例えば今、若者のダンスとか、ものすごい人数がいるんですけども、なかなかこのダンスを教える先生が育ってなくてですね、学校ではない部活もない。で、外に行かなきゃいけないとかですね、そんな話もいただくんで、そういったプラスアルファの要素というか、そういった思いで、新しい文化スポーツっていうのが、ちょっと支えてもいいのかなという思いで書かせていただきました。

（和座委員）

まず視点のところで、3番目の、先ほど話のあったスポーツ、新しいものに対して、もちろん今までの旧来のものも、しっかりと取り組みますということなんですけど、ちょっと私の立場から少し話しますと、私は開業医としていろんな方を診てる中で、健康について皆さんといろいろお話するときに、やはりポイントとなるのは、慢性疾患の場合、よく話が出るのはやっぱり食事と、それから運動ですよ。

その場合に例えば運動というと、何をやりますかっていう話になると、ジムに行ってますとか、様々なことがありますけれども、非常に多くの方がやってらっしゃるやっぱり歩くことなんですよね。この歩くときに、できるだけ魅力的に皆さんがこの町の中で歩き回ることができるような環境っていうのが、僕は、非常にありふれたことなんですけれども、そんなにお金をかけなくてもできると思うんです。

例えば、我々のところだと、近くに東漸寺だとか、様々な古いお寺なんかがあって、そういうところを巡るっていうことが好きな方もいらっしゃるし、あと、江戸川のあたりを、自然の中で歩いていくのもいいと思いますし、そういうふうな、何かいろいろな仕掛けというか、そういったものを、いろいろ作っていただくことができればいいかなと。

そのための道路整備とか、そういうこともしっかりと書いていただくとかですね。

そういったことも含めながら、そういう当たり前のところで、しっかりとさせていただくと我々としては、日々の診療の中で、非常に生かすことができるんじゃないかなというふうに思います。

それから、今度は1番目の福祉の視点の中のこどもの権利を保障するということなんですけども、市長もご存じの通りこども基本法というのが、こども家庭庁ができるにあたって、制定されたわけですけども、そこでしっかりとうたわれているのはこどもの人権のこと。生きる人権、それから成長する人権、そして守られる人権、そして参加する人権というふうにして、しっかりと4つぐらいの、人権があるわけですけども。

その中でも私常に言ってるんですけども、4番目の、参加する権利、つまりお子さんがみずから自分のいろんな意見を話をしながら、様々な形でこう、ある意味では施策に対してもコミットメントできるような、そういうふうなことも、すごく私としては、こどもの自己肯定感を上げていくためにも非常に重要じゃないかと思うんですね。

特に不登校の場合、不登校のお子さんっていうのは私も、自分のクリニックで、最近多いんですね。そういうお子さんと話していると一番強く感じるのはやっぱり彼らの自己肯定感の低さですね。非常に自分に対して自信がないみたいところで、非常にこもってしまってる。

もっとう、自分に自信を持って伸びやかにやっていただきたいと思うわけです。

そういうときに、1つはやはりこどもたちの意見に耳を傾けながら、そのこどもたちがやりたいことをとにかく伸ばしてあげる、良いところを引き上げてあげる、当たり前のことですけどね。あまりその欠点をあげつらうことなくやっていくことが必要だと思うんですけども。そういったことが非常に僕は重要じゃないかと思うんですね。

その点について、市長のお考えはいかがですか。

○松戸市長

まず最初の3番の方からいきます。

まさに先生がおっしゃる通りウォーキングというか、歩きやすいまちづくりってのは、私も公約の中で書かせていただいてですね。

まさに松戸って、自然もあれば、歴史的な資産もあるということで、そういったものを活用しながら、また歩道の整備であるとか、またちょっと歩きやすいように、ちょっと疲れたらベンチで休めるような、そういったまちづくりをしなきゃいけないということをそちらの健康づくりと観光の方で、書かせていただいている。

（和座委員）

今はちょっと暑くてね。歩かない方がいい。

○松戸市長

はい。そこは推奨せずにですね。おっしゃる通り、歩きやすいまちというか、歩いて気持ち良いまちをつくるというのは書かせていただいています。今回の教育大綱には書いてないんですけども、それはもうおっしゃる通りなんで、それを進めていきたいと思っています。

また福祉の方なんですけれども、やはり自己肯定感、やりたいことを伸ばすというのは、おっしゃる通りかなと。

その中で、例えば、今までであれば、勉強ができるかできないか、スポーツも、例えば特定のスポーツができるかできないかとかで、結構、学校では決まっていたのが、いろんな、例えばこの新しい文化スポーツもそうなんですけども、ダンスで活躍できる子もいれば、絵で活躍できる子もいれば、他の、さっきちょっとネガティブな部分もありますけど、eスポーツであるとか、いろんな部分で、漫画である、アニメであるとか、活躍できるチャンスを作りたいな。それがやはり自己肯定感に繋がっていくのかなと思っているので、そういう面でこの新しい文化スポーツとかを、入れていきたいなというふうに思っています。

（和座委員）

ありがとうございます。

その点についてですね、やはり1つの軸じゃなくて、例えば学歴とかあるいは偏差値とか、そういったことで、結構こどもたちってプレッシャーを感じてると思うんですね。

15歳の春とかって言いますけれども、その中で高校もある意味では序列化されてるような部分もあって、その中で挫折感を味わってしまうみたいなのところがあるわけです、日本の場合はね。

だからそういうふうなことの、ものさしを1つにすることなく、今、市長がおっしゃったように、様々な、その何ていうかな、ものさしを持っていく。

その中で私、実は年間何回か、小学校に一緒に行って授業を見させていただいてるんですが、その中で非常に印象的だった授業が1つあるんですね。

それはね、言語活用科という授業なんですよ。

この言語活用科という授業は、何か非常にこの松戸独特のものらしいですね。2007年、僕ちょっと調べたんですけども。非常に、面白いものだと思います。

これはですね、その授業で何をやったかという、あなたはというふうにして、自分の考えを人にわかるように説明するかっていうところを、ロールプレイをしながらね、みんなでディスカッションしてるような授業だったんです。

その中で、何かみんないろんなシートがあって、例えば、猫とか犬とか、様々なシートを自分でとるわけです。

その犬が好きですか嫌いですかっていう話になって、まず結論を言いましょうと、人に話すときは結論を言いましょう。

好きです。じゃあ何で好きなんですかって理由をちゃんと話しましょうっていうような、そういう非常に、ある意味では非常に簡単なフレームなんですけども、それをみんなでやり合ってるわけですね。僕は犬を取ったとかね、僕はカブトムシを取ったからってみんなでワイワイ話してるんだけど、その時の彼らの表情が非常によかった。

だから、そういう意味でもですね、この言語活用科というのは、やはりあんまりそのいわゆる認知的な知的な部分についての知識偏重ではなくて、自分の考えをどのように他人に表現をして、そして共

感をしながらコミュニケーションを図るかというところが結構眼目があるのかなあとあって、僕は非常に、興味を持って見させていただいたんですね。

いわゆるIQとEQってよく言いますけれども、いわゆる知的な部分についての部分が今まであまりにも日本ってというのは大きすぎて、その中で、こどもの肯定感とかってというのがやっぱりかなり阻害されてきてる状況があると思うんです。

逆に、EQという、これはよくご存じの通り、他人との関係の中で、相手の気持ちをわかってあげて、いかに自分の気持ちを伝え、そして物事を、行動として、しっかりとグループの中で、チームワークとしてやっていくかという、非常に大切な能力ですよ。

実際我々実社会に出て、多くの場合そちらの方が逆に大きいのかなって思ったりもします。

そういうふうな部分を育むような教育っていうのが、実は松戸では、こういった言語活用科というふうな形で僕非常に、あれうまくいってると思うんですね。

そういうことを含めて、様々な形で、これからも深く松戸の今のいいところを使ってですねやっていただければいいかなというふうに思います。

○松戸市長

ありがとうございます。

言語活用科ですか。どういう背景でとか。

（波田教育長）

ぜひ市長にも、1度ね、言語活用科の授業見ていただくと嬉しいなと思うんですけども。今和座先生の方で仰ってくださったように、ちょうどスタートしてから10年になるかなと思っています。

立ち上げのときにも私かかわらせていただいた人間ですので。まさに言葉を使って、自分の思いを相手に伝えるときに、例えばずらずらずらずと日本語の、悪さみたいなのところがあるのは、ずーっと理由を言って最後に、だからこうだねって結論を言うという。それが例えば英語などでは、まずしっかり結論を述べてからその理由を述べるというふうに、端的にわかりやすい表現をする。それが多分、これからの時代を生きていく子どもたちには必要だろうということで、今のようなお話の通り、スタートした教科です。ただこれは文科省の特例認定を受けて松戸が独自で行っている教科で、本来学習指導要領上にある教育課程の中身の一部を、この言語活用科に変えるという申請をしてやってる特別な教科ですので。ただ今申し上げたように、10年ぐらい経ってますので、ぜひこれはいろんな場面でも話すんですけども、少し見直しも含めて、たまたまこういうね、大綱を変えるという、非常にいいタイミングなので、見直しをしながらもっともし必要性が高いのであれば、授業時数をふやすなんていうことも考えるし、質の中身を変えていくなんてのもあります。

今の定着が大分図られてきたその大きな理由は、一応市教委の方でワークブックというのを作ってるんですよ。

小学校から中学校まで、日本語分野ですけど、ワークブックというのを作ってあって、それに従って授業をしていくと、松戸に初めて来た先生でも、その授業ができるような、作り込みをしていますので、それで大分良くなってきたなというふうに思ってます。

でも一方で英語分野というのも実はあるんですが、和座先生が紹介してくださったのは日本語分野の方なんですけども。

英語分野は、いわゆるクリティカルシンキング的なイメージで、英語のよさと日本語のよさをここへ合致しながら進めていきたいと思いますというようなものもあって、ちょっとこれだけ説明してるとものすごい時間になっちゃうんで、この辺でやめときますけども、とにかく言葉を使って、上手に自分の気持ちを伝えるというようなことがベースの授業です。

ただそこで重要なのは、相手が伝えていることをいかに聞かかっていうことも非常に重要なので、これは双方向です。単純に自分の意見だけ言えればいいじゃなくて、人が言っていることをきちんと聞きましょうということも含めて、言語活用科というものを構成してるので、まさに松戸が目指すことの姿に通ずるところはあるかなと私も思ってます。

また詳細はぜひいろいろなところで見ていただきながら、いろいろ議論したいなと思っています。

（中西委員）

今、言語活用科のお話も出ました。

新たに加える3つの視点に沿って少し、意見と、それぞれできれば市長のお考えもお聞きしたいのですが、言語活用科にも絡む話として、2番目の教育環境の視点のところですけども、言葉では、デジタルもというご発言もありました。

私がこれを見て思うのはデジタル社会とどう向き合うかっていうことがすごく重要なんじゃないかと思います。

で、それについて、言語活用科にデジタル化の視点っていうのが入ってこなければいけないかなと思いますし、その辺について、どうお考えなのかなというのを、まずお聞きしたいと思います。

福祉の視点の部分ですけども、福祉というと、かなり幅が広いんですけども下の方に書いてあるところを見ますと、やっぱりこどもの意見を、声をどう聞くか、どれだけ聞くかというところの視点が重要なかなと思います。

ですので、その点についても、市長がどうお考えなのかなというのを、改めてお聞きしたいと思います。

3つ目については新しい文化スポーツの視点ですけども、これは部活動の地域移行、地域展開とも絡んでくるお話で、ダンス部のお話なんかも出ましたけれども、今、現状で部活動ないけれども、地域とうまく連携すれば、できる、幅を広げられるっていうジャンルもあると思いますし、そういう視点についてお考えなのかなと思いましたので、3つも一遍にお答えいただくのも大変かもしれませんが、よろしくお願いします。

○松戸市長

まず環境の視点だと思うんですけども、デジタルとどう向き合うか、言語活用科とも関連するということだったと思うんですけども、まさにおっしゃる通りだと思います。

もちろんこの環境の視点というのは、デジタル以外にもですね先ほど話した、今年、進みますけれども冷房なんかもそうだと思うんですね。暑い中で、冷房が効いたところでやっぱり体育ができるというか、運動ができる環境整備をするとか、そういうことも含めてなんですけども、やはり今一番タイムリーというかですね、考えなきゃいけないのはデジタルの話だと思います。

ただデジタルで、タブレットですずっとやっているのが果たしてこれ本当にそれがいいのかとかですね、いろんな研究成果が今少しずつ出てると思うんですけども、あまり学習効果がよくないとか集中力だとか、そういう中でどう向き合うか、どういうコンテンツが教育に適してるのか適してないのか

とかですね、言語活用をどう取り入れるのかっていうことも含めて考えなければいけないと思っているというのが、この2番の私の考えで、それをどう教育に反映をしていくのかってことをみんなで考えましょうというのが、この視点なんです。

おっしゃる通り、デジタルとどう向き合うかってのは大事だと思ってます。

1つ目の福祉の視点の話なんですけども、こどもの声をいかに聞くかということも、やはり先ほどこどもの権利の話も出ておりましたけれども、そちらも非常に重要だと思っています。

あと先ほど冒頭で私挨拶でも言ったんですけれども、やはり体験格差のお話なんかもありまして、やりたいけれども、なかなかお金が、先ほど、地域移行の話もありましたけれども、そのお金がなかなか出せないから入らないというようなお子さんも実際にいらっしゃるのも事実でありますんで、そういった体験格差、教育の格差っていうのを何とかしなければいけないという点で、そういう意味での福祉の視点も必要じゃないかということで書かせていただきました。

そして文化とスポーツなんですけれども、これ地域移行の話で、おっしゃる通り、教育現場だけで完結できないような時代になっておりますので、オール松戸でと、先ほど言いましたけれども、そういった民間の方々の力を活用しながら、一緒に連携をしながら、こどもたちを支えるっていう点でもあると思っています。

ダンスなんかもまさにおっしゃる通りで、学校よりも地域のダンスチームが多いんですね。

ただやはり中学生ぐらいになると、ダンスに行きたい。でもやっぱり、さっき言った福祉とも絡むんですけれども、やっぱりお金がないからダンス行かないんだよっていう、そういう声も本当に聞いておりますんで、そういった点で、地域移行も大事なんですけれども、地域移行に、行きやすいというか、こどもがそこで活躍できるようにしなきゃいけないなという思いも持っているというところですよ。

（山形委員）

新しい3つの視点のお話を伺いながら、私は長く子育て支援に関わってある意味、福祉の視点という部分でずっと関わっていく中で近年すごく難しい課題感がたくさんあるなと思っております。

子育てしやすいまちナンバーワンということで、長く、松戸の名前はいろんなとこに聞かれてますし、ママさんたちにも、やっぱり子育て支援がいいからって引っ越してきた親子にたくさん私は会って聞く中で、教育は？ってなると、外に出られていく方、転勤とか今、同じ職場にずっといる方は少ないので、そういうことで、変化していくものがあるのだとは思うのですけれども。その中で福祉の視点というのはとても重要だなと思っていたので、今回先ほど事務局の説明の中での、あとは柱か視点か教育長が質問されていた中に、5番目の柱に福祉ってもう入ってもいいんじゃないかなっていうぐらい、重要な視点だなと思っています。福祉という響きに関して、いろいろな様々な考え方があるので、もしかしたらこれはWell-beingというか、当たり前の幸せっていうような視点のところで、何かしら届けていかなきゃいけないものとして、こどもの権利っていうところを柱にしていけるのかもしれないと思っていました。

本当にこどものことを考えるとして、こども家庭庁もありますが、こどもって一体何歳までなんだろうかっていう議論も少し必要なのかもとも思います。

子育て支援から言えば、妊娠中も含まれると思います。

話題は変わりますが松戸市でおきた、悲しい話をさせていただきます。

2023年の4月にですね、高校生の女の子2人が自死をしたことは、まだ記憶に新しいかと思います。

彼女たちは、どうしてあんなったのかなあという部分の中で、日本全体をとおして、実を言うとコロナ禍以降、高校生の自死の率は上がっています。

ここの観点は本当福祉の部分が多いんですがその出来事の内容なんかを見ていくとですね、最近支援の観点から勉強した中でリストカットをする子が、今5人から10人に1人ぐらいいる現状にあります。

そして調査の中では小学生まで低年齢化している傾向があるともデータにでています。

なぜ彼ら、彼女たちが自分を傷つけるのかという内側を見ると、嫌な気持ちをどうしていいかわからなかったというところが出てくるそうです。

それこそ、SOSを早く言えたらそれが起きなかったかもしれないという部分で、一点これは、最後にお答えいただければと思うのですが、この福祉の視点での10代の若者の居場所づくりは少し始まっているとは思いますが、そういうこどもたちの若者支援というところは松戸市弱いのではないかなというところがあったので、その部分を考えていきたいなと思いました。あとはプレコンセプションケアなどのところですね、そういう教育的な部分も、どのようなお考えがあるかを聞かせていただきたいなと思っておりました。

何よりも本当に不登校の子も、先ほど調べた中で1000名以上超えている状況下にあります。本当に誰一人取り残さないという部分や、もしくはその延長線上で保護者の支援というところも、ぜひ考えていただく中での大綱に福祉の視点が入ってくるのは大切だと思っております。

2点目の快適な環境、学習環境についても先ほどの議案でも、老朽化の修繕の議案がありましたけれども、その部分はもちろんやっただく中で、ハードだけではなくソフト、中身のところ、学習プログラムで、私は助産師なので外部講師で時折学校によんでいただくんですが、外部講師を呼ぶ予算がなく、いつもの先生を呼べなかったってことで結構声をかけることが最近、ちらほらと見えてきました。

私以外、助産師以外でも、他にも多様な外部講師による、教育を届けるというのも快適な学習環境だったりするのかなと思うので、この部分も、ハードだけではなくてソフトな視点も入ったものが盛り込まれるといいかなと思いました。

最後3番目なのですが、伊藤先生とはちょっと真逆な話をするかもしれませんが、eスポーツについて。松戸ってプロスポーツを誘致する場所がないんですよね。

場所もないし、プロの人もいないしってなったところで、でも、一方、企業の中でデジタルのコンテンツを開発している企業さんは幾つか松戸にいらっしゃるかなあと思います。プログラミングカフェはかなり早くから進めますし、eスポーツの経済効果という部分ではかなり大きなものがあると思います。

大会の優勝賞金が100万円台から1000万台となっているし、人口規模で言うと、数億人単位、世界まであればですけども、億単位でもありますし、ある意味グローバル化で、外国語でっていうところもあったりとか。なかなか外に出られない子が、オンラインを通じて友達になったり、そういう大学生と繋がって、そこでオンラインで繋がったからオフ会というか外に出てみたいというきっかけにもなったりするような形で、eスポーツに関しては、サブカルチャーの文化のにぎわい創生とかもやっていますよね。そういう部分でも、いろいろ様々なお考えがある方いらっしゃると思うんですけども、そういう部分では、コンテンツをいろいろ、持っているのは松戸のある意味ちょっと強みな部分もあるのかなとは思っていますというところが意見でした。

質問で、その若者支援のところについてぜひご意見を伺いたいです。

○松戸市長

その前にまず、おっしゃる通り、コンテンツとか教育環境ですね、ハードだけではやっぱりなくですね、やはりソフトの面の教育環境、整備しなきゃいけないというのはおっしゃる通りだと思っています。また、eスポーツに関してですけれども、いろんな意見があっていいと思うんですよ。

それこそ多様な話であって、これで活躍しなきゃいけないとかじゃなくて、eスポーツで活躍する子をする子で、松戸市にもトッププロがいるんで、そういった方を支援するってのも、まさに先ほどお話しした自己肯定感にも繋がるわけでありまして、それはそれで私はいいなと思って上げさせていただきました。

また1番ですね、おっしゃる通り10代の若者の支援というか、居場所づくりなんですけれども、例えば、先ほど言った子ども食堂なんかに関しては、松戸は、おそらく近隣の自治体の中ではかなり力を入れている自治体、なんですね。結構周りからは、非常に支援をしてもらってるよねっていうことを言われるぐらい支援をしてる状況なんですけども。やはり時代とともに、当初は貧困対策から始まった部分があって、それが老若男女問わずの居場所づくりになってきているという中で、どこまで対応できてるのかっていう部分は、まだまだ不足してる部分もありますので、若者もそこに来る、例えばおじいちゃん、おばあちゃんが来てですね、相談役になって、そういったところでちょっとはけ口になるとかですね。そういった支援というのも時代とともに変えていく柔軟性というのを、行政も持たなきゃいけないのかなあとと思っています。

そこに関しては、相談窓口など、まずそこをどういうふうにしたらいいのかというのは、しかも今、おっしゃる通り、若者の自殺が増えてる、過去最多を更新をしている。自殺者数に関してはある程度落ち着いてきてはいるんですけども、若者の自殺って非常に大きな問題になっているのは事実なんです。

そこでどういうふうにするのかっていうのは本当に考えなきゃいけないんですけども、その点、和座先生、医学的な見地をうかがわせていただきたいんですけど。

（和座委員）

お話あった通り、実際に大体10歳から40歳までの死因のトップは男女ともに、自殺なんですね。

50歳以降になると、今度は癌とかが出てきます。心不全とかね、含めて。だからいかに若い状況の中で、精神疾患を持ってそれが死因になってるってことはものすごく大きいことなんですね。

これは、すべての世界に共通してるんですね。

ただ、日本の場合は、こどもの自己肯定感、そういったものがすごく低いということはわかってまして。

ユニセフで、統計とりますと、OECDの中で、こどもの幸福感の中で、不幸だと言ってる国のトップが、実は日本なんですよ。

私たち医者の立場からすると、こどもたちの身体的な部分に関しては、本当に死亡率すごく低いし、乳児死亡率の低さはね、世界のトップですよ。

そういうふうな身体的なところで医学的部分については、世界のトップだと僕ら自認してるんですけども、ところが逆に、精神的な部分に関しては、非常にまだまだ大きな問題があるということで、私たちとしても、そこが一番やっぱりつらいところですよ。

だから、よく言われることは最初に芽を摘むということが必要になってくるということで、先ほど話が出ましたけれども、やはり、まずは余りにも過剰な、1つの物差しで見ていくようなものをできるだ

け多軸で見て、人を評価していくということが社会の中でも特に必要だし、特に子どもたちというのは感受性が非常に鋭いですから、そういう中で自分が学力なりあいったもので差別されてるということを感じることも自体が非常に辛いんですよね。

そこら辺のところがやはり日本の場合は、世界の中でも、かなり強い圧力がかかってるというのは、実は国連の児童の虐待委員会というのがありまして、そこが世界のいろんな子どもたちの環境を評定するんですね。4年か5年に1回ずつ評定するんですが、日本に対して勧告を出してる場所というのが、今言ったような、1つの物の価値観、特に学歴社会が強すぎて、それが子どもたちに対して非常に悪い影響を与えていることについての是正をしろということ、国連が言ってるんです。

あとちょっと僕は後で少し話したいと思ってることは体罰ですね。

これも非常に日本は遅れてると。

だからその点について、しっかりとした形で今後やっていかないといけないなというふうに思います。ちょっと答えにはなっていないんですけどもそんなところでしょうか。

○松戸市長

はい。ありがとうございます。

本当におっしゃる通りこの自己肯定感を高めながら、子どもたちが、幸せに生きられるような環境という点ではやっぱり福祉の視点を入れなきゃいけないなと。

ただこの表現がなかなか、教育やるときは難しい。福祉、本当に広いんで。

これは考えなきゃいけないんですけども。

（和座委員）

ちょっとよろしいですか。

その中でも特に子どもが何かといういろいろな形で参加できることってというのが、肯定感を上げるのには最も重要なファクターだというふうに言われてます。

だから例えば、子どもが何かをやったことをすごく褒めてあげるとかね。僕なんかも子どもたちと不登校の子といろいろと話してると、子どもたちができたことを褒めると本当に喜んでるんですよね。これができたねって。

それが、いわゆる社会的にどうのこうのじゃないんです。その子にとって重要なことであれば、一緒になって褒めてあげて、そこがすごく重要だと思うんですね。

だからそういうような、何かこう、肯定感っていうかな、こどもの参加する権利というのがあるけれども、彼ら自身が、例えば何か社会的にね、自分が考えたことでこんなふうに変ったとかって言ったものすごく自信になるでしょうね。

だから、よく言われることも議会みたいなやつがあって市長さんと直接話をしてね、その中で子どもたちが自分がこういうふうな、子ども会を作ってみたいってということについて、具体的な成果が上がってくれば、子どもたちはもうどんどんどんどん自己肯定感が強くなってくると思うんですよね。

○松戸市長

そうですね。

そういった機会を作るってのも大事なことですよね。教育としても、行政としても。

(武田委員)

ここの最初の基本理念のところで、教育したいと思える環境を作りますというところが、ある一面において子育てしやすいまちっていうのを作ってきたのも、その導入部分だったと思うんですね。

だけれども時間がたって、今、市長が出してくださった快適な学習環境って何だろうっていうものを考えていく中で、この5年の中で何が変わったのかっていうと、まず、デジタル媒体としてのタブレットを1人1台配ったっていうのは、教育大綱を決めた後なんですね。

あと、昨年に文化スポーツの部署を市長部局に移管したのも去年の話。

というように、結構いろいろ具体的なことが変わってきて、教育委員会から離れたもの、あるいは課題として残っているものというのが。それと同時に、教員不足は加速度的に、もう正直これは打開できないです。だけれども何とかしなきゃいけない中で、こどもを増やしたいなんて言うけれども、まず環境が整ってないところにこどもを連れて、そこに学びに住みに来ようなんて思わないですよ。だから、じゃあ何をしたらいいんだろうっていうところでやっぱり考えるんですけども、先ほど中西委員もおっしゃってたように、デジタルとどう向き合って、新しい教育環境を作っていくかっていうのは、もしかするともうそろそろいい加減にきちんと取り組んでいかなければいけない課題なんじゃないかなということを私は個人的に感じてます。

これを言うと反対する教員は必ず一定数いるんだろうなっていうことは想定してるのでなかなか口にするのは難しいんですが、ただ、質の高い教育が、ある程度ベーシックに選ばれるっていうことは親にとって非常に望ましい学校環境であることは間違いない。

私の想像なんですけれども、最初にタブレット一人に1台渡されますよっていう話が出たときに、そういう未来が来るんだろうなって勝手に思ってた5年後と違う5年後が今あるんですね。

つまり、文房具だと言い続けて、デジタルで可能な事があまり積極的に実行されていない少し残念な結果にあることが事実な割には、市が使ってくださってる予算がものすごく莫大でこれからどんどん重なっていく。

先ほどから出ていたメンタルの問題っていっぱいあって、一人一人のこどもに向き合う時間が、増えれば増えるほど、授業研究とか専科で1つの科目をみんなチームで、教育者が授業研究するような、あるいはそれがコンテンツ化して、振り返り授業はコンテンツで見られるとか、極端に言うとそのぐらいいやらないと、子ども達のメンタルに寄り添う時間的な余裕や、学習のフォローアップまでできるって多分ならないと思うんですね。

そういう自由な学習のために一人1台づつ与えられていることをもっと有効活用できるような施策を、ちょっと予算組んで考えていただけたら有り難いです。教員不足とか教員のモチベーションを高めるっていうのに、体をとにかく疲れさせないで頑張ってもらうっていうことを提供すると、環境づくりはおのずと先生たちは教えたいしこどもたちを愛してる方たちなので、時間的な余裕ができればもっとして下さることって増えると思うんですね。

今年は、AI元年なんて言われてますよね。それは、世の中的には3年後ぐらいに想定してたものももう前倒し前倒しできています。

何か思いっきり変えていくようなことを、考えてもいいんじゃないかなって思ってます。

それと文化のところで、松戸の魅力と価値を高めますの何をどういうふうにしたらいんだろうって迷うと思うんです。

つまり、そんなに松戸って、観光的な文化が何か、京都とか金沢とかみたいにドーンってあるわけではないです。

人口も、魅力を持って住み続けて欲しいって言ったって、首都圏ですから、流出流入があって当たり前で、別にそれを止めるものでもないし、ただ、流出しても、流入する人が、あそこは嫌だって言わないで選んでくださる場所であれば、大いに結構なわけで、だけれども何がこの愛着心に結びつくのかっていうところで、私は地元愛と醸成っていうところにすごくこだわったのを自分で記憶してるんですね。

何でかっていうと、私郷里が富山なんですけれども、地方都市でも、そんなになんていうか京都とか金沢みたいなブランド都市じゃなくても、大きな祭りにはみんな地元に戻ってくるんです。

つまり、経験した幸福感のある体験は、親があれを連れてってこどもに見せてやりたいとか、経験させてあげたいとか、確実に思うわけですね。

その時だけでも、流入人口が増えるだけでも、大いに価値はあると思っていて、それが文化なんじゃないかなというふうに思う。

3年ぐらいなと思うんですけれども、音楽フェスティバルはすごく有効に活用されていて、やはり松戸の中で音楽に対して、12月に、松戸の市内の飲食店界隈でやってる、コンサートとか、音楽フェスティバルとかを拝見しますと音楽に関わっている方が非常に多く、前向きに活動してらっしゃるっていう状況はよく見えるんですね。

そういうものに、協力していくとか力を、手を差し伸べていくっていうことで、安定した文化に醸成していくと思う。何かイベントをやったから文化行事じゃなくて、安定した文化っていうところに繋がるんじゃないかなと私は思っていて期待しているところです。

そこに関連して、部活動の地域移行ですが、文科省も揺らいできて言葉がちょっと右往左往してるのが現状じゃないですか。

それはなぜなんだっていうところに、いろんな意味があると思います。やっぱり、ベーシックにそれを支えるような、民間企業で、協力してくださる体制があるようなところはどんどん推進していますけれども、残念ながらそうでない地域が日本全国に多いので、なかなか前に進まないという現実がある一方で、本当に真逆に、あんな大変だと言われながら教員の一部では、やっぱり、担いたいと思っているマインドがある。

これは確実にあるもので、部活の顧問の先生がかつて自分が部活動で得た幸福体験を先ほどと一緒になんですけれども、今度はこどもにプレゼントしたいと思う人たちが、きちんと教員という立場になって、初めて部活動の顧問という立場になって提供してる。これはものすごい幸福循環としては正しい、いい文化だなというふうに私は思っています。

それを全部取り上げるのが果たしていいことなんだろうかとこのところで、これは文化でもスポーツでも、いろんな部活動がありますけれども、確実にいえることなのではないかなと思います。

テレビで、ブラックウッドさんという教育社会学の研究者の方が面白いことをおっしゃっていて、ずっと日本の中の部活動のことを研究してらっしゃる方で、アメリカではスポーツクラブみたいなものを、部活の代わりにしてる。そこでは勝つことにすごく注力をして、その成果が全部自分の進学とかそういうものの、プラスアドバンテージになっていくんだっていうことをすごく主張する。

だけれども、日本の部活動の子たちにインタビューすると、レギュラーになれなくても3年間やってるのに、一生懸命毎日遅刻しないで来ているとか、あるいは、女子とか言うとジェンダーに引っかかってしまうかもしれませんがマネージャーっていう立場を、すごく自分が前向きに頑張っている現実があって、それはなぜですかと問うたら、新しい友達ができることとか、人のために頑張れる喜び、ありがたうって言われたことに対して幸福感があるっていう答えがちゃんと帰ってくる。それはちょっ

とアメリカではありえないって彼は言ってたんですけれども、やっぱり基本的に日本人特有の利他の精神というか、そういうものがあって部活動っていうものが成立してるんだなと。

これは本当に教育者である先生方が、きちんと子どもたちを見て育て、担任ではない、頼れる大人の1人として、部活動の顧問という人達がいらっしゃるのではないのでしょうか。こどもって、信頼できる人をどこに置くか選ぶんですよね。必ずしも学級担任だけではない。保健室の先生かもしれないし部活動の顧問かもしれない。

そういうものを増やす機会を減らしてしまうことが本当にいいことなのかというのを、もう1回現場からのアンケートからスタートして、丁寧にやらないと、一過性的に発信して走ってしまっただけを切り捨ててしまったら、二度と元に戻すことはできない。

捨ててしまったものは元には戻らないので、丁寧に進めるべきなんではないかなというふうに思っています。

すいません今いろいろ言っちゃったんですけれども、全部繋がってるなっていうのが私の感覚で、そんなことをもし想像していただけたら嬉しいなと思います。

○松戸市長

はい、ありがとうございます。本当にいろいろな方面から、デジタルどう向き合うとか、安定した文化の話であるとか、部活動の話ですとか、本当に貴重なご意見だったと思います。

しっかりと議事録にも入ってますので、できる限りしっかりと反映をしていきたいなとは思っております。

（波田教育長）

教育長の波田です。

この後事務局さんの方で素案を作っていられるんだろうなというふうに思うので、そういう意味も含めてちょっと今、感じていることをお話ししたいなというふうに思っています。

まず一番最初に教育大綱を作った時の下準備に私はかかわらせていただいていた立場で、そのあと、期間がたって、現行の、松戸市の教育大綱が今できていて、これを来年に向けて、見直し改定していこうという、その流れの真っ最中なんだろうなというふうに思ってます。

そうすると、もちろん市長さんのいろんなお考えもあるので、これが180度物事が変わるとか、もう本当に抜本的に形が変わるのかというのは、それはまたそれでいいことだとはもちろん思うんですけれども、一応今の資料1のあるように、案として出してきていただいたのが、現行の教育大綱について、それをベースに、新たな3つの視点を加えるというような作り方をしていこうというふうに、今理解していますので、そういった点からと考えますと、現行の教育大綱や今回の、新たな視点のところで見ていくと、もう1回多分あの言葉をきちんと整理すべきだろうなというふうに思ってます。

まず、基本理念のところにある、みんなで育てる、みんなが育つ松戸の未来、これのみんなという意味合いがどういう「みんな」なのか、あるいは、「で」「が」、がどういう意味なのか、こういうところを案として考えていったときに、この文言がベストあればそれはそれで構わないんですけども、いろんな意見の中で、その辺のところの言葉を少し変えていくべきなのか、そんなことも1つあるのかなというふうに感じました。

それから、いろんな議論の中で今回の3つの視点でも、共通のキーワードは、間違いなく環境だと思います。

私、今の自分の立場で教育行政を進めていくときに事務局の方にも話をしてるんですけども、この環境という言葉はどう使うかというのは非常に重要だろうというふうに思ってます。先ほど市長さんもいみじくも言ってくれましたけど、2番の教育環境の視点の中の快適な教育環境というのは、単に、空調を入れるよとか、タブレットを渡すよとか、そういったハード的な話だけじゃなくて、質の部分、ソフトの部分も含めての環境なので、もしかしたらこの快適という言葉よりももっといい言葉が当てはまるのかもしれないね。

そういうふうに環境ということ、すべての福祉の視点もそうですし、新しい文化スポーツの視点でもそうですし、現行の大綱の基本理念を支える4つの柱の1、2、3、4それぞれの部門に間違いなく、環境という言葉が入ってきています。

ですので、この環境というのをどう捉えるのかというのが非常に私は重要だと思います。

私が学校現場でよく使っていたのが、禅宗の道元という方がよく言っている、霧の中を行けば知らずして衣濡れるという言葉があります。つまり霧の中を何となく歩いてると自分の服がしっとり濡れるよというようなイメージなんですけど、これは良い環境にいればよくなるし、悪い環境にいれば悪くなるよというような、もののたとえなんです。

だから、そこで最後にまとめている言葉として、環境は人が作るということを言ってます。環境は人が作ります。

だとすると、私たちが掲げるこの大綱というのはまさに私たちが作る環境であるべきだろうというふうに思いますので、その点をぜひしっかり視野に入れながら、素案づくりをしていただけると、非常に市長さんの思いも反映されるだろうし、今ここで議論をしているような、まさに和座委員がおっしゃったようなこどもの人権の視点もそうですし、山形委員が本当にいつも言ってくださるような、こどもの幸せ感っていうのはどういうことなのかとかというような視点もそうですし、もうまさに、今の部活動の話も根底から見直していくということも含めて、様々な部分ですね。

先ほどちょっと話題になった言語活用科の、今松戸の目指すものをちょっと、追加資料としてお配りさせていただきましたけども。さっき私が伝えるっていう言葉を話しましたが、わかりやすく伝えるんですよ、松戸の場合は。ただ伝えるんじゃないで、わかりやすく伝える。

それがロジカルシンキングの部分で、相手の伝えようとしてることを理解するっていうクリティカルシンキングの部分があるよっていうところが、まさにこういった言葉を使ってこどものコミュニケーション能力を高める。グローバルな社会で活躍できるこどもの環境をいかに作るかっていうようなことなのかなというふうに思います。

これは学校教育の範疇ですけども、それ以外に、生涯学習や社会教育の範疇も含めて、大きな、松戸市の市民をみんなで育てるのか、みんなが育っていくのかと、その辺のところを含めながら、環境というところをキーワードにぜひ、素案づくりに取り組んでいただけるといいのかなというふうに思います。

○松戸市長

はい、ありがとうございます。議論は尽きないと思うんですけども、間もなく時間なので、それぞれ何か言い残したことあればお願いします。

(伊藤委員)

今の教育長の発言に関連して私もぜひ、素案づくりまでにお伝えしたいなと、自分の意見を言いたいなと思ってましたので、それを簡単に申し上げたいと思います。

今回の教育大綱ですが、私も過去作るときに関わったというか、こういう会議に参加していたので、ある程度責任があるんですけども、その時から気になってたことがあって、市長も代わられたので、そういう新しい視点で見えていただきたいというのは、この教育大綱でいろいろ書いてあることの中に、松戸のまちづくりというか、こういうふうな松戸にしていきたいという、これは基本的に市長であれば松戸をどうしていきたいかというのは当然お持ちだと思うんですけども、その松戸のまちづくりがこの教育大綱の中に随所に入っているんですよ。

教育大綱というのは、結果的にまちづくりにつながるとしても、直接的にそれを目的とするものではないと思います。

教育大綱というのは松戸に住む人たちに、いかにすばらしい教育環境を提供するか、そういうことなので、その結果どういう松戸にしていきたいのかどうかっていうのはもちろん無関係ではないんでしょうけれども、何かあまりそういう松戸のまちづくりが表に出てくると、本来の教育大綱ではなくなってしまうんじゃないかなというのは私自身、そういったものをずっと抱えていたので、今回、できればその松戸のまちづくりという側面をなるべく今回の教育大綱から薄めていただきたいなというふうに思っています。

具体的に言うと、例えば、さっき教育長がおっしゃった、基本理念の「みんなで育てるみんなが育つ松戸の未来」の中の、みんなで育てる、みんなが育つはいいと思うんですが、その結論としては松戸の未来ではなくて、そうした教育を松戸は進めていきますということだと思います。ここに示された4つの柱で松戸の教育をしていくんですということであって、その結果松戸の未来がどうなるかというのはもちろん教育も絡むけれども、それ以外の要素も多分に絡むので、そこにこの結論として松戸の未来っていうふうに入れちゃうのはどうかなと思うんですよ。

現教育大綱の基本理念のこの黄色い枠の中で、「みんなで松戸の未来を創ります」というようなことも、これはもう松戸の未来づくりというのは、いろんなまちづくりの面もあると思うので、教育を通じて松戸の未来をつくります、じゃなくて松戸の市民が、何かやっぱりそういう幸せを追求していくというのがこの教育なので、そこが混同されないようにしていただきたいなというふうに思います。

それが1つで、あともう1つ重要な点だけ申し上げますと、4つの柱の1の「子どもたちが可能性にチャレンジする」の中に、ぜひ入れていただきたいと思うのは、在留外国人が非常に増えてるんですよ。6月末の時点で2万5000人を超えました。地域全体の割合からいうともう5%を超えてるんですよ。ですからこれは千葉県の中でいうと、富里というところが8%ぐらいあるんですけども、あと成田が7%ぐらいあるんですが、松戸が3番目なんですよ。で、人口50万人を超えているまちの中で、外国人の数はもう数としても圧倒的に多いし、その割合が5%を超えているというのは全国平均はせいぜい3、4%なので非常に多い。

今後もおそらく増えていくと思うので、そういう在留外国人のこどもたちに対する支援というか、日本語教育を支援するとか、そういったものを含めた1つの柱を、言葉で入れていただきたいというのが1つです。

それから、2つ目は、「教育したいと思える環境をつくります」というところの中に、松戸で教育したいと思われる環境として、教育をする指導者というか、そういった先生たちへのケアというか、そういったものも、ぜひこの柱として入れたほうがいいんじゃないかなと。その一環として例えば学校の

教師の働き方改革への取り組みにも真剣に取り組むんだというようなことも含めていいんじゃないかなというふうに思います。

それから4つ目の柱の「文化とスポーツで松戸の魅力・価値を高めます」というのもこれは完全にまちづくりの一環なんですよ。ですからこれもこういう表現ではなくて、市民みんなが、文化とスポーツに気軽に取り組める環境を作りますとして、そういったサービスを提供するんだというような形にして、これは直してもらったほうがいいのかなというふうに思います。

それから最後に、松戸の歴史文化を保護継承して学習することは大事なのですが、その結果、松戸に誇りと愛着を持つ心を育てますというのは何かいかにも押し売りの感じがします。私は松戸に生まれ育ったわけじゃなく別にふるさとがあるんですが、特にそういう教育を受けたわけではないんですけども、やっぱり、こども時代をすごせば、その場所に何というかそういう愛着心というか郷土愛ってのは生まれるんですよ。

ですからあえて松戸が何かそういうものを押し付けるような格好で、ちゃんとこういうのを勉強して松戸に愛着を持ちなさいと言わなくても、そういうのは自然に生まれるものだと思います。したがって、そういう松戸の文化とか歴史とかそういったものを教えればいいんであって、その結果松戸に誇りと愛着を持つ心を育てますというほど、市が、教育大綱の中でわざわざそういうことを謳わなくても、それは市民の中に自然に生まれてくるし、その後松戸から離れても、年をとれば松戸に対する愛着ってのは当然出てくるわけなんでね。あえてそこは言わなくてもいいのかなというふうに思いました。

以上です。

○松戸市長

ありがとうございました。

そろそろということで、よろしいでしょうか。

今日いただいたご意見に関しては、しっかりと参考にさせていただいて、また第2回目以降で、皆様にお示しをさせていただきたいなというふうに思っております。

それでは最後に事務局から連絡事項があればお願いします。

○渡邊政策推進課長

皆様ありがとうございました。

では事務局から連絡でございます。

次回の会議の開催日程につきましては、市長部局事務局と教育委員会事務局が協議をさせていただき、決定しましたら、皆様にご連絡させていただきますので、よろしくお願いいたします。

連絡事項は以上でございます。

◎閉会

○松戸市長

それではこれもちまして、令和7年度第1回総合教育会議を終了させていただきます。

お疲れ様でございました。

ありがとうございます。